

研究成果報告書

2024年 8月 30日

1. 所属・職・氏名 等

文学部英文学科 講師 堤博一

2. 研究課題（テーマ）名

言語の知識を支える統語操作と解釈アルゴリズムの研究

3. 研究期間

2023年度

4. 利用した研究費の種類及び金額

若手教員研究促進交付金 100,000円

5. 研究の概要

この研究では、生成文法理論の極小主義アプローチに基づき、言語知識の構造とその解釈アルゴリズムの解明を目指した。特に、基本句構造の生成とその変形を担う「併合」という統語的操作の役割を再評価し、従来の外的併合と内的併合に加えて、より複雑な過程として「探索」という操作を導入した。この「併合-探索理論」によって、これまでの理論では説明が難しかった構文現象を効果的に分析する新たな枠組みを提案した。

また、N. Chomsky の新理論である言語運用系による転位現象の解釈に関して、従来の統語的分析との比較を行い、その妥当性と問題点を批判的に検討した。これにより、言語運用と統語構造の相互作用に関する理解を深めた。

さらに、日本語の不特定代名詞に対する新たな意味論的アプローチを採用し、その分布や用法に関する制約を明らかにした。不特定代名詞が全称量化子を意味するという仮説に基づき、形式意味論の最新の理論を用いて、その多様な使用法を一貫して説明する方法を提案した。以上の研究成果は、生成文法理論と意味論の両方の分野で新たな知見を提供し、言語知識の内実の理解に貢献することを目指している。

6. 研究成果等

① 「併合」と「探索」による統語論:

この研究は、極小主義生成文法の枠組みの中で、基本句構造の生成と派生的構造への変形を単一の演算である「併合」によって説明する理論に対する代替案を提示している。特に、外的併合と内的併合の違いに着目し、内的併合には「探索」と呼ばれる追加の操作が関与することを提案した。この「併合-探索理論」は、従来の理論では説明が難しい構文や言語現象の分析に有効であり、形式意味論における「合成原理」に基づいた統語構造の意味解釈を支

える新たなアプローチを提供する。

② N. Chomsky の新理論の検討:

この研究では、N. Chomsky の提案するボックス理論を検討した。本理論は移動現象を統語構造の構築操作ではなく統語構造の解釈過程で説明しようとするものである。転位現象が統語構造に反映されないという立場の妥当性について分析を行い、弱交差制約を自然に導く一方で、転移要素に含まれる照応代名詞の束縛領域における問題を指摘した。

③不特定代名詞の意味論分析:

日本語の不特定代名詞について、英語の wh 代名詞と比較して広範な用法を持つことに注目し、不特定代名詞が常に全称量化子を意味するという仮説を立てた。さらに、J. Gajewski の「L-分析性」概念や I. Ciardelli らの探索的意味論を活用して、不特定代名詞の分布制限を説明する試みを行った。

7. 研究の実績（論文・発表 等）

1. 日本英文学会東北支部第 78 回大会（2023 年 12 月 9 日、於 東北学院大学）シンポジウム「近年の生成文法理論の展開とその可能性」を企画。同シンポジウムにて「ボックス理論下での統語表示の意味解釈」発表
2. Fukui Generative Linguistic Workshop 2024(於 福井大学、2024 年 2 月 22 日)にて「Search as a syntactic operation: a generative implementation of λ -abstraction」および「The distribution of indeterminate pronouns in Japanese: a semantic perspective」発表
3. 日本英文学会第 96 回大会（於 東北大学 2024 年 5 月 4 日）シンポジウム「ラベル理論をめぐって」にて「ボックス理論におけるラベルの役割」発表。
4. 慶應言語学コロキウム（於 慶應義塾大学、2024 年 6 月 23 日）「ボックス理論における統辞論および音韻論・意味論とのインターフェイス」にて「ボックス理論における転置の解釈」発表